雀こ

井伏鱒二へ。津軽の言葉で。

太宰治

長え長え昔噺（むがしこ）、知らへがな。

山の中に橡（とち）の木いっぽんあったずおん。

そのてっぺんさ、からす一羽来てとまったずおん。

からすあ、があて啼（な）けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

…………

ひとかたまりの童児(わらわ)、広(ふろ)い野はらに火三昧(ひざんまい)して遊びふけっていたずおん。春になればし、雪こ溶け、ふろいふろい雪の原のあちこちゆ、ふろ野の黄はだの色の芝生こさ青い新芽の萌えいで来るはで、おらの国のわらわ、黄はだの色の古し芝生こさ火をつけ、そればさ野火と申して遊ぶのだおん。そした案配(あんばい)こ、おたがい野火をし距(へだ)て、わらわ、ふた組にわかれていたずおん。かたかたの五六人、声をしそろえて歌ったずおん。

――雀、雀、雀こ、欲(ほ)うし。

ほかの方図(ほず)のわらわ、それさ応(こた)え、

――どの雀、欲うし？

て歌ったとせえ。
そこでもってし、雀こ欲うして歌った方図のわらわ、
打ち寄り、もめたずおん。
――誰をし貰ればええべがな？
――はにやすのヒサこと貰れば、どうだべ？
――鼻たれて、きたなきも。
――タキだば、ええねし。
――女くされ、おかしじゃよ。
――タキは、ええべせえ。
――そうだべがな。
そうした案配こ、とうとうタキこと貰るようにき

まったずおん。
——右（みぎ）りのはずれの雀こ欲うし。
て、歌ったもんだずおん。
タキの方図では、心根っこわるくかかったとせえ。
——羽こ、ねえはで呉れらえね。
——羽こ呉れるはで飛んで来い。
こちで歌ったどもし、向うの方図で調子ばあわれに、
また歌ったずおん。
——杉の木、火事で行かえない。
したどもし、こちの方図では、やたら欲しくて歌っ
たとせえ。

——その火事よけて飛んで来い。

向うの方図では、雀こ一羽はなしてよこしたずおん。タキは雀こ、ふたかたの腕こと翼みんたに拡げ、ぱお、ぱお、ぱお、て羽ばたきの音をし口でしゃべりしゃべりて、野火の焔よけて飛んで来たとせえ。

これ、おらの国の、わらわの遊びごとだおん。こうして一羽一羽と雀こ貰るんだどもし、おしめに一羽のこれば、その雀こ、こんど歌わねばなんねのだおん。

——雀、雀、雀こ欲うし。

とっくと分別しねでもわかることだどもし、これや、うたて遊びごとだまさね。一ばん先に欲しがられた雀

こ、大幅(おおはば)こけるどもし、おしめの一羽は泣いても泣いても足(た)えへんでば。

いつでもタキは、一ばん先に欲しがられるのだずおん。いつでもマロサマは、おしめにのこされるのだずおん。

タキ、よろずよやの一人あねこで、うって勢よく育ったのだずおん。誰にかてても負けたことねんだとせえ。冬、どした恐ろしない雪の日でも、くるめんば被(かぶ)らねで、千成(せんなり)の林檎(りんご)こよりも赤え頬ぺたこ吹きさらし、どこさでも行けたのだずおん。マロサマ、たかまどのお寺の坊主(ぼんず)こで、からだつきこ細くてかそぺないはでし、

みんなみんな、やしめていたのだずおん。

さきほどよりし、マロサマ、着物ばはだけて、歌っていたずおん。

――雀、雀、雀こ欲うし。雀、雀、雀こ欲うし。

不憫(ふびん)げらに、これで二度も、売えのこりになっていたのだずおん。

――どの雀、欲うし？

――なかの雀こ欲うし。

タキこと欲しがるのだずおん。なかの雀このタキ、野火の黄色え黄色え焔ごしに、悪だまなくこでマロサマば睨(にら)めたずおん。

マロサマ、おっとらとした声こで、また歌ったずおん。
——なかの雀こ欲うし。
タキは、わらわさ、なにやらし、こちょこちょと言うつけたずおん。わらわ、それ聞き、にくらにくらて笑い笑い、歌ったのだずおん。
——羽こ、ねえはで呉れらえね。
——羽こ呉れるはで飛んで来い。
——杉の木、火事で行かえない。
——その火事よけて飛んで来い。
マロサマは、タキのぱおぱおて飛んで来るのば、とっ

けらとして待づていたずおん。したどもし、向うの方図で、ゆったらと歌るのだずおん。

――川こ大水で、行かえない。

マロサマ、首こかしげて、分別したずおん。なんて歌ったらええべがな、て打って分別して分別して、

――橋こ架けて飛んで来い。

タキは人魂（ひとだま）みんた眼（まなく）こおかなく燃やし、独りして歌ったずおん。

――橋こ流えて行かえない。

マロサマは、また首こかしげて分別したのだずおん。なかなか分別は出て来ねずおん。そのうちにし、声た

てて泣いたのだずおん。泣き泣きしゃべったとせえ。

――あみださまや。

わらわ、みんなみんな、笑ったずおん。

――ぼんずの念仏、雨、降った。

――もくらもっけの泣けべっちょ。

――西くもて、雨ふった。雨ふって、雪とけた。

そのときにし、よろずよやのタキは、きずきずと叫びあげたとせえ。

――マロサマの愛（め）ごこや。わのこころこ知らずて、お念仏。あわれ、ばかくさいじゃよ。

そうしてし、雪だまにぎて、マロサマさぶつけたず

おん。雪だま、マロサマの右りの肩さ当り、ぱららて白く砕けたずおん。マロサマ、どってんして、泣くのばやめてし、雪こ溶けかけた黄はだの色のふろ野ば、どんどん逃げていったとせえ。

そろそろと晩げになったずおん。野はら、暗くなり、寒くなったずおん。わらわ、めいめいの家さかえり、めいめい婆（ば）さまのこたつこさもぐり込んだずおん。いつもの晩げのごと、おなじ昔噺（むがしこ）をし、聞くのだずおん。

長え長え昔噺（むがしこ）、知らへがな。

山の中に橡の木いっぽんあったずおん。

そのてっぺんさ、からす一羽来てとまったずおん。
からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。
また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。
また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。
……………………

底本：「太宰治全集１」ちくま文庫、筑摩書房
１９８８（昭和63）年８月30日第１刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
１９７５（昭和50）年６月～１９７６（昭和51）年６月
入力：柴田卓治
校正：丹羽倫子
１９９９年９月12日公開
２００５年10月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。